

バドミントン競技レベル向上のための選手育成システムに関する一考察

A study of contestant upbringing system to improve the level of a game of badminton

1K07B154-7 西本 卓矢

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 関 一誠先生

【序章】

私は小学3年生の頃からバドミントンを始め、今年の10月に体育会バドミントン部を引退するまで14年間続けてきた。小学6年生の頃、現役時代に中国のナショナルチームの選手として活躍していたコーチと出会い、指導を受けるようになった。コーチから中国の先進的な指導を受けるようになったことで、飛躍的に実力をつけることができた。その頃から中国におけるバドミントン競技の取り組みに対して関心を持つようになった。そのコーチの影響もあり、高校1年生のときに上海市にある青少年体育運動学校に短期留学をする機会を得た。年齢別に分かれて練習を行い、強い選手が上級学校へと選抜されていくシステムを目の当たりにして、日本との大きな違いに衝撃を受けたのを今でも覚えている。また、短期留学を通して、日本人選手と中国人選手との間に技術面・身体能力・精神面のすべてにおいて大きな差があることを痛感した。私は自身の経験から、中国の強さの秘訣は選手の育成システムにあると感じた。それらを明らかにすることで日本の競技力向上に役立つのではないかと考えたのが本研究の動機である。

そこで本研究では、日中比較により日本の選手育成システムの課題を明らかにし、バドミントン競技において世界トップを誇る中国の選手育成システムと、他競技の選手育成システムの特徴を参考に、これからの日本の育成システムについて検討することを目的とした。

【第1章】

第1章では、日本と中国の競技レベルの差を明らかにするために、各種国際大会の中で最も高いレベルのBWFイベントにおける競技成績を比較した。個人戦で最も高いレベルに位置づけられている世界選手権大会・オリンピック大会、男女別団体戦で最も高いレベルに位置づけられているトマス杯・ユーバー杯、男女混合チームで行われるスディルマンカップの両国の競技成績比較を通して、全大会で中国のほうが好成績を収めていることが確認された。その結果、日本より中国のほうが圧倒的に競技レベルが高いことを明らかになった。

【第2章】

第2章では、バドミントン競技の選手育成システムの日中比較を行った。日本の選手育成システムでは、ナショナルチームやジュニアナショナルチームに選考された選手は、定期的に行われる強化合宿で強化され、国際大会へと派遣されるが、その他の選手の育成に関しては、選手個人の力および各所属チームの指導者の裁量にまかされているのが現状である。一方、中国の選手育成システムは、初級、中級、高級の3段階に分かれたピラミッド式になっており、各段階で選抜教育を行っている。国家的な支援を背景に、指導者同士が協力し合いながらチャンピオンを育成していく公平なシステムを採用し、一貫した理念のもとで指導が行われている。日中間には、選手の選抜方法や国家の強力な支援体制、指導者に対するシステムに差異があることが明らかになった。

【第3章】

第3章では、バドミントン競技レベル向上のための選手育成システムの確立に向けた取り組みについての考察を行った。第1節では、サッカーやバレーボールの一貫指導の理念を大切にした選手育成システムについて検討した。第2節では、福島県での「ビクトリープログラム」を取り上げ、バドミントン競技における一貫指導体制の利点と課題を明らかにした。第3節では、日本バドミントン協会主導の選手育成システムについて考察した。日本のバドミントン競技レベル向上のためには、「一貫指導体制の構築」、「地域の強化拠点の整備」、「指導者の育成・確保」の3点が必要であることが示唆された。

【結章】

バドミントン競技レベル向上のために一貫指導体制をとることが有効であることが明らかになった。しかし、全国各地域からナショナルチームまで一貫指導体制を確立している中国と比べ、日本はごく一部の地域での中高一貫体制の確立しかできていないのが現状であった。トップ選手を互いの協力的な取り組みによって育成していくという意識を指導者側にもたせること、地域の強化拠点の整備が今後の課題である。